

地域の隠れた資産を明らかにする試み

「自然エネルギーは、その地域の気候風土に深く関わる形で存在しています」。そう語るのは、特定非営利活動法人環境とくしまネットワークの代表理事・島田公(いさお)さん。「ただ、具体的に見えないから、その価値がなかなか分からない。そこで、このタイプの機器を使えば、これぐらい発電できるという実証データを示すことが理解への近道だと考え、活動を続けています」

助成3年目を迎えた本プロジェクトは、徳島県勝浦郡勝浦町、香川県高松市塩江町をはじめ四国の5カ所(左ページの地図参照)を対象として、実証データの収集と普及啓発活動を地域のNGO・NPOなどと連携して進めている。



体験会を前に市販の小型水力発電機を溪流に設置する島田さん

「小規模・分散型の自然エネルギーは、農業や食品製造業、観光業などと連携して活用できれば、地域の雇用拡大にも結び付くと思います。だからこそ、実証実験の段階から地元の方々に参加していただくことが大事なんです」

自然エネルギーで、四国(志国)創生!

今回訪ねた高松市塩江町での活動には、地元の特定非営利活動法人奥塩江交流ボランティア協会が協力している。当協会は塩江町にある廃校となった中学校 保育所施設を拠点に活動しているが、当日はいくつか用意されたプログラムの一つとして、午前中の1時間、施設脇を流れる溪流で小水力発電体験会を開催。地元の人をはじめ、高松市内などから30名を

小水力発電体験会に30名を超す参加者

超す参加者があり、盛況となった。「ほら、見てください」と島田さんが発電機をつないだテスターを示すと、2ボルトほど発電していると表示された。



島田さん手作りの水力発電機を例に仕組みを説明

前列中央が代表理事の島田 公さん。左側が特定非営利活動法人奥塩江交流ボランティア協会代表の大西祐二さん。その他の方は同協会のメンバー



「あんなに小さな手作り発電機でも、このように電気がつくれるのです。今度はLEDにつないでみましょう」。LEDがバツと明るくなると、参加者から小さな歓声が上がります。「これを使えば、炊飯器でご飯が炊けるかしら?」という質問に、「いや、それはちょっと無理ですね。ただ、水力発電は交流。家庭で使っているのと同じなので、そのまま使えるんですよ。ほら、LEDがついたでしょう?」へえ、そうなんだ!」

興味津々の参加者から今度は「太陽光発電はどうなの?」という質問が寄せられる。「太陽光発電は直流。だからパワーコンディショナーという機器で交流に変えないと、家庭では使えません」



前回の体験会参加者が自作した水力発電機。今回、発電量の測定を依頼された

加者の意識は確実に変わります」と話す。

太陽光発電を活用した電気柵の実証実験も

高松市塩江町は徳島県に隣接する山間部で、全国的に問題となっている鳥獣被害が増えている。そこで、新たな取り組みとして始めたのが、太陽光発電を活用した電気柵の実証実験だ。小水力発電体験会が開催された場所から、険しい山道を車で登ること約20分。実験サイトは標高680mの山肌に広がる耕作地で、イノシシの被害に悩む所有者が協力を申し出た。

設置されているのは、小さな太陽光発電装置とそれにつないだ電気柵。この電気柵に触れると瞬間最大8千ボルトが発生する仕組みになっている。

島田さんいわく、「センサーカメラを設置しているので24時間監視が可能ですが、ここは圏外でケータイが使えないため、データの送受信ができません。これからは現場チェックのために、週に一度、通うことになりま

す」。期間限定の実証実験とはいえ、なかなか大変な活動である。風力、太陽光、小水力など地域に眠る自然エネルギーの可能性を、足と熱意で掘り起こし続ける島田さん。

助成団体レポート 行ってきました! 「小水力発電体験」の現場



耕作地に設置された周囲約200mの電気柵。手前の棒にセンサーカメラを設置



太陽光発電装置のパネルは約30cm四方で12ボルトのバッテリーを内蔵

来年度は、これまでに蓄積した実証データと各地域で構築してきたネットワークをベースに、事業化に向けた提言を予定しているという。

取材協力 特定非営利活動法人環境とくしまネットワーク <http://kankyoutokushima.web.fc2.com/index.html>

徳島県鳴門市を本拠地に、四国各地の過疎地で「地エネ活用プロジェクト」を進めている特定非営利活動法人環境とくしまネットワーク。今回は、活動現場の1つ・香川県高松市塩江町での活動の様子をレポートする。

農山漁村で自然エネルギーを地産地消!

